

禅の友

Zen no Tomo

3

March 2026





ご本山だより

大本山永平寺

【山門での問答】

大本山永平寺

福井県吉田郡

☎〇七七六―六三一―三二〇二



今年も新たな修行僧の上山じやまかみがはじまりました。つい数日前まで学生生活を謳歌おうちかしていた者、企業に勤めていた者、他の修行道場で修行をしていた者、それぞれが様々な背景や思いを抱えながら門をたたきます。

しかし、いざ山門の前に立てば年齢や経歴、それまでの経験などは一切関係がなくなりまます。

山門前に一列に並んだ上山者の前に、かあん客行という役の古参和尚こさん(先輩の修行僧)がやってきます。そしてこのように質問をします。「あなたたちはここに何をしに来た」。そう問われた者たちは大きな声で「修行をしにきました」と答えます。すかさず客行和尚は「では、修行とはなんだ」と聞きます。負けじと「道元禅

師さまの教えを学ぶことです」「仏の教えを求めることです」などと返答します。しかし客行和尚は「そのような事は永平寺にこなくてもできるだろう」とかれらの言葉を一蹴いっさくしてしまうのです。それでも必死ひつじに求道の気持きもちちを表した上山者たちはついに山門をくぐる事を許されます。

そして網代笠あじろがさをとり草鞋わらじを脱ぎ、着付けを調えたならば、お釈迦さまがいらっしやる仏殿に向かって三度の礼拝をします。身も心も釈尊、道元禪師、歴代仏祖の教えにお任せする事を誓います。こうして、上山者たちの永平寺での生活がはじまります。

自らの名前を忘れるほど一挙手一投足に集中し、気を緩める事なく仏行に励む日々がはじまるのです。



ご本山だより

大本山總持寺

【如来蔵】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎ 〇四五―五八一―六〇二一



春の息吹が感じられるようになったこの頃、總持寺では新しい修行僧が上山してきています。

これまで学生や社会人として様々な生活スタイルを過ごしてきた彼らではありますが、ひとたび本山に入ったなら全く今までとは違った衣食住となります。僧堂どうどうに起居して和合の精神で一心に修行に励むのです。

それ故、個人的な勝手な言動は慎まなければなりません。この共同生活をしながら、みなと共に修行に励むことを「大衆一如だいしゆいちにょ」と言います。

標題の【如来蔵にょらいぞう】とは、すべての衆生（生きとし生けるもの）の心の中に本来備わっている、仏（如来）になる可能性や本性のことです。

「如来を胎児として宿すもの」を意味し、煩惱に覆われているが、修行によって開花し、悟りに至ることができると説きます。

上山される雲水うんすいが修行して自分の可能性を最大限開花できることを期待しています。

さて、十七日（火）から二十三日（月）は春季彼岸会です。毎日多くの檀信徒が参詣され御先祖さまの御霊に手を合わせます。

この期間、午後二時より山門春季彼岸施食会法要が大祖堂だいそどうにて厳修げんしゆされます。特にお中日の二十日（金）には、石附いしづき禪師ぜんじさまが大導師を勤められます。

選・坊城俊樹

シャツター街風だけが戸を叩き

東京都 鈴木英治

評

この様なせつない風景が最近増えた。皆商売を辞めてしまった町には風の風だけが通り抜けてゆく。

- ◆ 暮れやすき日の風邪気味の女かな 千葉県 長澤きよみ
- ◆ 冬空に狐の嫁の入る兆し 愛知県 後藤美帆

◆ 枯木道かくも小さき位牌抱き

山口県 御江恭子

◆ 虎落笛独り暮しを囃すかに

島根県 俵 保恵

◆ 侘助や閑じたるままの躰り口

山口県 中井清子

◆ 神々し北風に立つ農婦かな

三重県 荻屋奈良美

◆ 人間に近過ぎてより熊狩られ

秋田県 伊藤剛司

◆ 大晦日寂滅為楽の鐘の音

愛知県 渡辺秀子

◆ 公園の風の振りや檀まゆみの実

埼玉県 新藤共子

◆ あと何度できることやら障子貼る

神奈川県 佐野 勇

選者吟

しとしとと只しとしとと冬の雨

俊樹

作句小見

本当に簡単な構図、だからこそ冬の雨の冷たさ淋しさが身に入みると感じた。これは都心の風景。

選・長澤 ちづ

奥玉の地藏田まるく一筆で書くごと植え
て渦巻に刈る

岩手県 千葉 喜恵

評 岩手県一関市千厩町の奥玉の地の地藏田。そこで収穫した米をお地藏さまに奉納するため、稲をまたがずに田植えができるようにと丸い形をしているらしい。その地の信仰と人々の暮しがあたたかく伝わっている。

亡き夫の鼓動つたはる心地せりペアの
時計の刻む十年

北海道 加藤 智子

評 ペアの時計なればこそ夫婦の情愛がこもる。腕時計ということも了解できるし、そこに身体感覚も生まれる。デジタルの時計では表せない世界である。

◆ 一夜ひと夜秋を重ねて二本のまるき満天星紅深めゆく
群馬県 松本 さえ子

◆ 陽の色に熟した柿は甘きゼリーとろつと掬う太陽を掬う
神奈川県 三澤 米子

◆ 去年こぞ見ざる鶴の渡りを神無月朝ごと認むひんがしの空
広島県 徳永 進一郎

◆ いかなごの不漁を知りて思われる釘煮をくれし人の安否が
島根県 宮廻 恒雄

◆ 亡き母の縫いて残せる綿入れの袖無しつねに吾が背温む
鳥取県 徳本 義則

◆ 窓の灯にさそわれ入る洋館はワインと洋書あふるる古書店
鳥取県 井上 美幸

◆ 大津波に浸りし庭の片隅に万年青は重なる赤き実抱けり
岩手県 阿部 照子

◆ ちぎれ雲消えゆくまでを窓に追う術後の居場所ベッドあるのみ
静岡県 杉原 民子

◆ 来て居るかいつもの川のあの辺り番の鴨のやはり居りたり
静岡県 小川 健治

選者詠

厨辺の山椒の木の播り粉木の守り神とも

早半世紀

ちづ

作歌小見

松本さんの一首、数の扱いが巧みですね。徳本さんからは鶴も渡りをすると教えられました。杉原さんの断念の思いが措辞からきつぱりと伝わって来ます。ご快復の早いことを心から祈っています。